

Newsletter

Vol. 05
Mar. 2021

Center for Research on the Dynamics of Civilizations

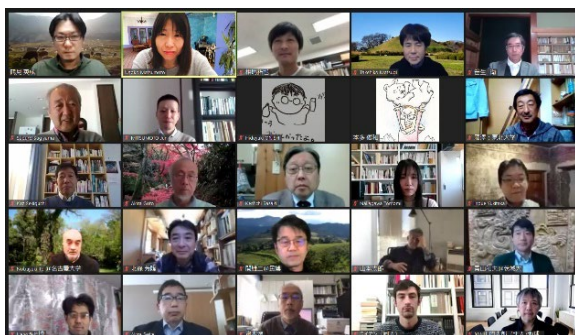
編集・発行：岡山大学大学院社会文化科学研究科附属文明動態学研究センター

発行日：2021年3月31日

新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」プロジェクト、第四回全体会議と国際フォーラムを開催

新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」は、日本、中南米、オセアニアを主な対象地域とし、寒冷気候や海洋に適応していった人類の環境戦略と生態的地位(ニッチ)を考古学や民俗学、脳科学、遺伝学など複眼的な視点から総合的に解き明かすことを目的としています。文部科学省科学研究費助成事業の新学術領域研究として2019年度から5カ年をかけて取り組んでいます。

本プロジェクトの第四回全体会議が、新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ、1月9日～10日にリモートで開催されることになりました。



全体会議のリモート集合写真の一部

7本の口頭発表と62本のポスター発表が行われ、一年間の研究活動の状況や今後の課題が共有され、研究の方針を確認し、議論を深めることができました。口頭発表は、古墳のLiDAR測量、人類のニッチ構築におけるアート/技術の果たした役割、社会複雑化と戦争、集団間関係の民俗学的アプローチ、土偶を中心とした人工物の顔認識、集団移動の形質人類学的研究、そして土器や人骨の三次元計測と多岐にわたる内容であり、刺激の多い2日間となりました。

また当初の計画では今年度グアムで国際会議を

開催することになっていましたが、新型コロナウイルスの状況が改善せず、止むを得ず延期となりました。その代わりに、本プロジェクトのA01班の後藤明教授(南山大学)が中心となって、LiDAR(航空レーザー)測量調査をテーマとした国際セミナー「Frontiers of Archaeological Site Survey」が1月24日にオンラインで開催されました。

2016年に世界遺産に登録された、東ミクロネシアにあるナン・マドール遺跡およびテムウェン島を対象に、保存管理計画を作成するため、国際記念物遺跡会議(ICOMOS)のダグラス・コマー氏と文化遺産研究保存財団(Cultural Site Research and Management Foundation)のジェイコブ・コマー氏がLiDAR測量を行ったが、その調査についてお二人にご講演いただきました。



ダグラス・コマー氏によるご講演

講演のあと、コメンテーターの長岡拓也氏(パシフィック・ルネサンス代表理事)・光本順准教授(岡山大学)・松本剛准教授(山形大学)は、それぞれのフィールドにおけるLiDAR調査事例を報告し、LiDARによる調査実績、現在直面している課題、そして今後の展望に関する理解が深まりました。活発な質疑応答のあと、本セミナーも盛況のうちに終わりました。

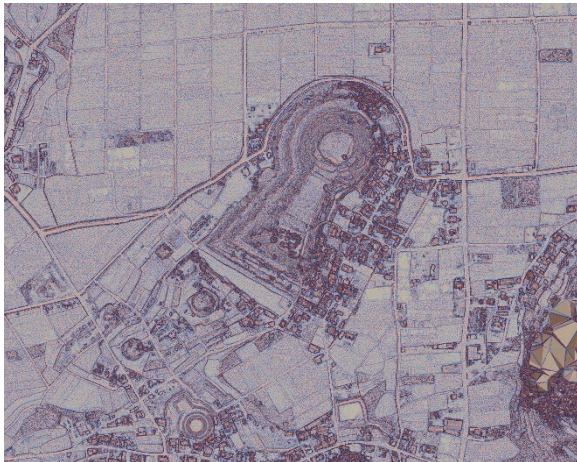
海外で調査実績の多いLiDAR測量は最近日本でも実施されるようになっていきます。その中でも、岡山大学の光本順准教授を中心に岡山県内の主要な古墳のLiDAR測量が行われており、今後の成果が期待されます。

LiDAR 測量による古墳と周辺地形の 解明

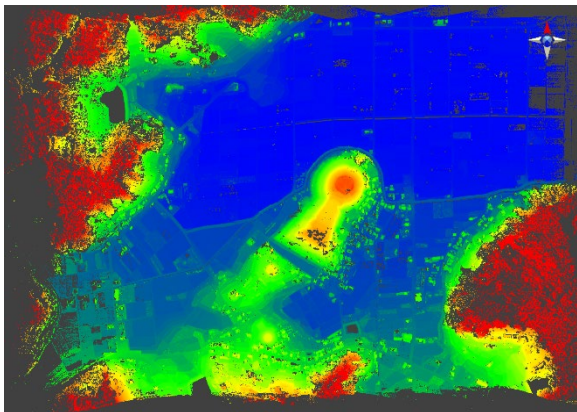
岡山大学文明動態学研究所所長・松本直子教授を代表とする文部科学省科学研究費助成事業（新学術領域研究）「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明—」（科研費研究課題：JP19H0573X）のうち、A01 班は「人工的環境の構築と時空間認知の発達」をテーマとし、モニュメントと社会との関係を探っています。2020 年度は、A01 班の分担者、岡山大学大学院社会文化科学研究科・光本順准教授を中心に、岡山市造山古墳群と総社市作山古墳を対象にドローンによる LiDAR 測量（航空レーザ測量）を行いました。

2020 年 3 月 19～23 日、岡山大学チームは、ドローン飛行や LiDAR 測量、後処理解析などについて、(株) アジルジオデザインと (株) 快適空間 FC による講習を受け、その一環で造山古墳の LiDAR 測量を 2 日間にわたって実施しました。

7 月 4・5 日、古墳本体と周辺地形との関係を追究するため、6 基の古墳を含む造山古墳群を中心に 1 km 四方を計測する調査を実施しました。



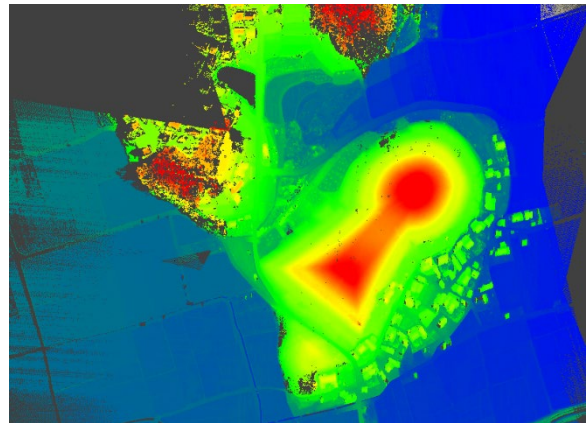
造山古墳群と周辺地形の CS 立体図



造山古墳群と周辺地形の色別標高図

業者による測量サポートを受けながら、本学チームは当日の測量と解析を行いました。3 月測量時に比べ、下草の繁茂が激しく、地表面へのレーザ到達数が少なくなったことが課題として浮上しました。

11 月 28～30 日、本学チームは愛知県立大学や南山大学など、本新学術領域研究に参加している他の海外調査の研究者とともに、作山古墳の測量を実施しました。今回の飛行ルートの実成は本学チームで素案を作成し、業者による調整を受けました。安全面に加え、効率よくかつ正確に計測するためのコース計画について理解を深めることができました。下草が夏季に比べ顕著でなく、地表面へのレーザ到達数が多く、より充実した計測が実施できました。



作山古墳の色別標高図

2021 年 1 月 10 日、本新学術領域主催第 4 回全体会議において、光本准教授がこれらの成果をまとめ、「巨大古墳の UAV-LiDAR 測量とその展望」と題して発表を行いました。残る課題と今後進めていくべき作業が明らかとなりました。

上述の造山古墳群では、下草などの植生が繁茂しレーザが地表面まで到達しない場合や、その他にも、ドローンから照射するレーザの角度によっては、樹木近辺の地表面のデータ量が希薄になってしまうこともありました。そのため、2 月 8 日、造山古墳群で地表面の計測が十分できていなかった部分を中心に、補足の LiDAR 測量を行い、データの統合を図りました。これにより、より完成度の高いデータと図面の作成が可能となりました。

2020 年度、本学チームは主体的に LiDAR 測量の実施とそのデータ解析に力を入れてきました。2021 年度はこれらのデータの分析を踏まえ、古墳築造と周辺地形との関係を探求しながら、新たな古墳群の計測にも着手する予定です。記念物築造の社会的意義の解明が期待されます。（ライアン）

文明動態学研究所設立への期待： well-being 研究の取り組み

2021年3月まで社会文化科学研究科長兼文明動態学研究センター長の釣雅雄です。今回は、私が参加している岡山大学「瀬戸内サステナビリティ&ウェルビーイング研究プロジェクト」の紹介をしたいと思います。

これは株式会社ベネッセホールディングスとの共同研究(2020年度~22年度)で、学長直轄の全学プロジェクトです。直島・犬島・豊島の3島を中心とした地域における住民のwell-being(ウェルビーイング)を学際的な視点で分析しています。社会文化科学研究科からも3名(青尾先生、西田先生、私)が参加しており、文明動態学の研究テーマとも密接に関係しています。

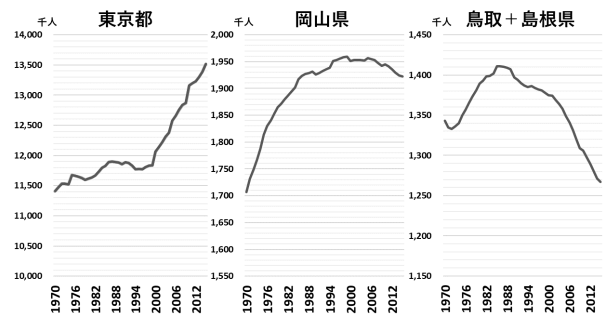


私の専門はマクロ経済学と呼ばれる分野で、特に日本における経済政策の効果の研究を続けてきました。経済政策では絶対的に優れている政策を見つけるのは容易ではなく、通常はバランスが必要になります。岡山大学が推進するSDGsは持続可能な発展への取り組みですが、持続可能もバランスの問題です。例えば、時間的バランスを考えると、現在、地球の資源を使い尽くせば、将来の社会や環境が破綻してしまうかもしれません。

岡山大学が取り組むべき課題としては、地域社会の持続可能な発展があります。日本でSDGsが関心を集めている背景には、一部の富裕層あるいは都市部に富が集中し、かつ、富を生み出すための環境破壊や労働人口移動による文化継承の断絶の問題があると思います。私は社会のバランスが崩れているのではないかと感じています。

図は「人口推計」(各年10月1日現在)で、都道府県別人口の推移(1970~2015年)を東京都、岡山県、鳥取県+島根県について見たものですが、東京都が増加している一方で岡山県、そしてより高い率で

山陰地方は減少しています。また、1人当たり県民雇用者報酬(2017年)をみると、東京都は岡山県の1.22倍、鳥取県の1.45倍となっています。格差拡大傾向は2000年代以降に強まっています。



人口や地方経済の成長はすでに難しくなっており、単純な所得増加で地域社会を守ることではできなくなっています。持続可能な社会を考えると、生活の質が重要です。ウェルビーイング研究では、自然、文化、地域が調和されたときに住民の生活は豊かになるのではないかと問題意識を持っています。

生活環境に関わる概念の一つとして、故宇沢弘文氏が提唱した「社会的共通資本」というものがあります。宇沢氏は著書の中で「ゆたかな社会とは、すべての人々が、その先天的、後天的資質と能力とを十分に生かし、それぞれのもっている夢とアスピレーションが最大限に実現できるような仕事にたずさわって、その私的、公的社会的貢献に相応しい所得を得て、幸福で、安定的な家庭を営み、できるだけ多様な社会的接触をもち、文化的水準の高い一生をおくることができるような社会である。」(宇沢弘文『社会的共通資本』岩波新書、2000年)と述べています。

私は、これらの島々では、環境や芸術を含む社会的共通資本の整備が行われてきたと捉え、このような資本の蓄積が、地域住民の社会的厚生(ウェルビーイング)にどのような影響を与えているのかについて、既存研究を整理しつつ、実際にどうなのかを分析していこうとしているところです。

社会文化科学研究科附属文明動態学研究センターは、2021年4月に文明動態学研究センターに生まれ変わり、地域動態研究分野がテーマの一つに加わります。地域動態研究分野では、地域問題の解決を目指し、経済学、法学、社会学などの分析手法を用いた瀬戸内研究などが行われます。人口減少と少子高齢化、グローバル化、新型コロナウイルス感染症拡大などの変化に対して、地域の人々の豊かな生活に貢献する研究となることを期待しています。

第8回・第9回「災害文化と地域社会形成史」研究会を開催しました

2020年11月23日に「近世・近代移行期の地域社会と歴史認識—大名家・藩庁資料伝来の背景を探る」をテーマに第8回「災害文化と地域社会形成史」研究会をZOOMオンラインにて開催しました。

天野真志(国立歴史民俗博物館)さんが「出羽国佐竹家の由緒をめぐる政治と歴史意識」を、胡光(愛媛大学)さんが「高松松平家の家産経営と地域社会」を報告いたしました。近世の大名家のあり方が近代の地域社会に大きく影響することが各地で明らかにされていますが、そうした動向を念頭に置きつつ、両報告では大名の由緒という歴史意識の背景、大名家資料の伝わり方が論じられました。

2021年1月23日には、「中近世の災害と地域社会」をテーマに、第9回「災害文化と地域社会形成史」研究会をZOOMオンラインにて開催しました。矢田俊文(新潟大学)「中洲・流路変化から考える中世・近世の地域歴史像」、片桐昭彦(新潟大学)「年代記研究と中世・近世の災害」、西山昭仁(東京大学)「近世京都における震災対応」の三報告があり、年代記の歴史史料としての取り扱い方、地震資料の丹念な読み込みによる揺れによる被害想定の可能性などが示されました。

地域歴史資料のレスキュー活動

2019年11月に神戸ネットの仲介により受け入れたY家文書については、整理を完了し、無事に返却いたしました。コロナ禍のため、2020年1月以来となる11月の作業では、4名でY家文書の撮影・補修・目録作成を行いました。Y家文書は、倉敷市の個人宅に伝来した、丹波篠山藩士であった先祖に関する資料群で、西日本豪雨で被災したものの、歴史資料ネットワークを経由して情報がもたらされたことを契機にレスキューされました。所蔵者の移住にしがたがって歴史資料も移動し、移住元と移住先のどちらの自治体文化財担当部局にもその存在が把握されなくなることは珍しくありません。そのような状況と豪雨を乗り越え、史料ネット同士の横の繋がりを活かして救われたことは大きな成果です。

同じく、2020年10月に受け入れたT家の巻物1点については、処置を完了しこれも返却いたしました。2020年11月にN家の襖下張り14面分の寄贈を受けました。脱酸素処理を施し、2021年度以降、本格的に整理を進めていく予定です。

文明動態学研究所新設についての記者発表が実施されました

3月18日、岡山大学本部棟で4月1日に新設する文明動態学研究所についての記者発表が行われました。文明動態学研究所は文明動態学研究センターで行ってきた活動をさらに発展させた組織です。



記者発表の様子

考古学、歴史学、人類学、経済学、社会学、哲学等の人文社会科学を核とし、岡山大学および国内外諸機関の地質学、生物学、化学、物理学、神経科学、情報科学等の研究者との緊密な連携のもとに人類文明の来し方・行く末を探求する文理横断型研究拠点です。所長は文明動態学研究センターの松本直子副センター長が就任します。人文・社会科学系の研究所が国立大学に設置されるのは、中国・四国・九州地区では初めてです。

また文明動態学研究所(RESEARCH INSTITUTE FOR THE DYNAMICS OF CIVILIZATIONS : 略称 RIDC)のロゴ発表もありました。「ともに」をコンセプトに「異分野横断研究」「人類の過去現在未来」など、様々なキーワードを包括してデザインが設計されています。



社会組織、技術、信仰、経済、芸術などが、相互に関連しあい、人の生き方をどう変えるか、その複雑な動態を明らかにすることが文明動態学の目的です。過去から未来へ、地域から世界へ、というふたつの基軸において、人類社会が抱える課題を多角的に研究し、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」を視野に入れながら、持続可能な社会の構築に貢献していきます。